

拝啓

この度は、『エッセイで読み解く教育・指導のエッセンス』をお送りいただきまして、ありがとうございます。また、冒頭にご紹介していただきましたことは、本当にありがたく、名誉のことと喜んでおります。重ねて御礼申し上げます。

私も71歳になりました。あのエッセイの中で、宗内先生が席を譲られたころの年齢になりました。たまに東京に行くのですが、電車の中で、席を譲られることが、ここ何回かありました。嬉しいような、嬉しくないような……。自分では、まだまだと思っているのですが、外から見れば明らかに老人として見えているという現実にはちょっとがっかりしてしまいますが、仕方ありません。

改めて「母と子」を読ませていただきました。本当に教科書に載せたいいいお話です。今の世の中、一番欠けているのが副題であります「やさしさと厳しさ」であると思います。とって、この問題を学術的に解析したり論述することはなかなか難しいようにも思います。宗内先生がおっしゃるように、「読み物（エッセイ）」ならわかりやすく、その上情緒的に引き込まれ思わず読み進んでしまいます。本当に大切なことを具体的で身近なお話の中に端的に表現する手法は、誰もが納得しやすく、しかも感動をもって読み解くことができます。「やさしさと厳しさ」とは何か、世の親はこれをどう実現していったらよいのか、この物語を読めば一目瞭然でしょう。

私の大好きな『二言、三言、世迷い言』のように、楽しく軽妙に世相を切る宗内先生ならではの筆力が、難解な学術書を「読み物風専門書」に仕上げただけ。まさに宗内先生の独壇場であり、手法としても最強と思わずにはられません。

「母と子」を読み直してみますと、前半の部分は、美しい母と子の物語ですが、たまには見かける光景であるように思います。これはこれで十分に見事な親子です。しかし、後半の部分を読ませていただくと、本質は後半にあることがよく解ります。普通的美談を劇的にめったにお目にかかれない感動物語に一変させてしまうのですから。

疲れて眠っていた女の子は、席を譲ったことには必ずしも得心していなかったことは明らかです。（ましてまだ必ずしも老人になり切っていない元気な宗内先生に譲ったのですから） 終点駅に近づいた時の宗内先生のとられた行動こそが、今でいう神対応だったと思います。まだちょっと割り切れない思いがくすぶっていたかもしれない女の子を一瞬にして輝かしい表情に変えてしまいました。奇跡を起こしたとも言える宗内先生の行動、人間力こそ、この物語のもう一方の主演であったと思います。

この女の子は、疲れて寝ていた自分が無理に起こされて席を譲ることにちょっと疑問を持ち、不満を抱えていたかもしれません。あるいは、他者への親切に疑問を持ったり、席を立たせた母にも不満を感じたり、自分自身にも嫌悪感を抱いていたのかもしれない。母の優しい愛撫に身をゆだねることでさざ波の立つ胸の内を収めようとしていたのかもしれない。

そこへ宗内先生の感謝の言葉に添えられた「こんな優しいお母さんに育てられて、きっと、優しい立派な人になりますね。頑張ってるね」は、魔法の言葉でした。「少女の顔がさっと輝き、若い母親の顔が、そっとはにかむ」。そして足早にバスから降りようとする宗内先生の背中に明るい少女の声が飛んできた、「さようなら」。振り返った時の少女の笑顔と母の笑顔。二人がそっと手を振ってくれる。こんな美しく、微笑ましく、晴れやかなシーンはほとんど見かけることはないように思います。最高のシーンだと思います。

宗内先生の神対応により、母の優しさと厳しさを、この女の子に一層効果的に確実に届けられたと思います。さらに、いかに母の素晴らしい行動であっても、ふといじけそうになるかもしれないリスクもあったと思います。これを大逆転して、女の子に、見事、喜びと、自信と誇りを取り戻してあげ、母を敬愛し、他者も愛する素晴らしい人間性を育てることにつながったこと（と思います）が、ここが最大のポイントだったのではないかと思います。これが、宗内先生がおっしゃる教育者の専門性、人格性なのだろうと勝手ながら解釈いたしております。

ちょっとした出来事を、そのままにせず、専門性と人間性で改めて眺めた時に、すごいことに発展させていくことができる。あるいは、見過ごしてしまうと悲劇につながるようなことであっても、機転とアイデア（これも専門性と人間性なのでしょうか）によって、それを食い止め、逆にプラスに変えてしまうこともできる。そんなことを感じさせていただきました。

そのほかの論文も読ませていただいております。初めて読む物も多く、本当に多くの示唆をいただいております。まだ読了に至っておりません。それぞれが読みごたえがあり、ゆっくり勉強させていただいております。まずは御礼と思ひまして筆を執らせていただきました。

向寒の折、お体にご留意いただき、ご活躍されますよう、お祈り申し上げます。

敬具 保坂 三雄